

■ 解答・解説

問1（解答例）目を閉じて雑念を払い、心の中で一心に神々に祈っており、的中をひたすら願う、真剣で必死な姿勢が読み取れる。

<解説>「目をふさいで」は目を閉じること、「心のうちに祈念して」は声に出さず心の中で祈ること。声高に願うのではなく、目を閉じて一心に祈るところに、与一の真剣さ・必死さがよく表れています。

問2 仏（神仏）に深く帰依する・心からおすがりする、という意味。

<解説>「南無」はもとはインドの言葉で、「お従います・おすがります」という意味を表します。「南無八幡大菩薩」で「八幡大菩薩さま、どうかおすがり申し上げます」と神仏に呼びかける言い方になります。

問3（一点目）あの扇の真ん中を射させてください、ということ。（二点目）もし射損じたら自害する覚悟なので、どうかこの矢を外させないでください、ということ。

<解説>与一は「あの扇の真中射させてたばせたまへ」と的中を願い、続けて「この矢はづさせたまふな（＝この矢を外させないでください）」と重ねて祈っています。的を射当てたいという一途な願いを、神々にすがって述べている場面です。

問4 イ（とりわけ）

<解説>「別して」は「特に・とりわけ」の意味。八幡大菩薩をはじめとする神々に祈ったうえで、「とりわけ日本の神々よ」と、さらに範囲をしばって念を押している場面です。「わざわざ（ア）」「別れて（ウ）」「その上さらに（エ）」では意味が通りません。

問5 「させ」は使役の助動詞「さす」の連用形。

<解説>「射させてたばせたまへ」は、「（私に扇を）射させてください」という意味。「させ」は「（神が私に）射ることをさせる」という使役を表し、下に「て」が続くので連用形です。「たばせたまへ」と重ねて、神への強い願いの形になっています。

問6 どうか、あの扇の真ん中を射させてください。

<解説>「願はくは」は「どうか～してください」と願望を表す言い方。「射させて」の「させ」は使役、「たばせたまへ」は「（神が私に）～させてくださる」という意味で、「お与えくださいませ・～させてくださいませ」と訳します。「たまへ」は命令形で、強い願いを込めた表現です。

問7 イ

<解説>「射損ずるものならば、弓切り折り自害して（＝もし射損じたら、弓を折って自害して）」「人に二度面を向かふべからず（＝二度と人に顔を合わせるわけにはいかない）」という言葉は、失敗すれば命を絶つという、退路を断った悲壮な覚悟を表しています。よってイが正解。ア・エは覚悟の重さに反し、ウは扇の的を射る場面の内容と合いません。

問8 もしこれを射損じることがあれば、弓を折って自害して、二度と人に顔を合わせることはできない。

<解説>「射損ずるものならば」は「もし射損じたなら」、「弓切り折り」は「弓を折って」、「面を向かふべ

からず」は「顔を合わせることはできない（してはならない）」の意。失敗すれば死ぬという、退路を断つた悲壮な覚悟を述べています。

問9 ③「迎へ」＝ハ行下二段活用・未然形。④「おぼしめさ」＝サ行四段活用・未然形。④は、源氏の神（八幡大菩薩などの神々）の動作に対する敬語で、種類は尊敬語。

＜解説＞③は下に推量の助動詞「ん（む）」が続くので未然形。「迎ふ」はハ行下二段。④「おぼしめす」は「思ふ」の尊敬語で、ここでは「(神々が) お思いになる」の意。「本国へ迎へんとおぼしめさば（＝もう一度故郷へ帰してやろうとお思いになるなら）」と、神の心を敬っています。下に接続助詞「ば」を伴う未然形です。

問10 現代語訳…どうか、この矢を外させないでください。「な」の意味…禁止（～するな・～しないでくれ）を表す。

＜解説＞「はづさせ」は「外させ」で、「(私に) 矢を外させる」という使役。文末の「な」は、上の動詞を受けて「～するな・～してくれるな」と禁止を表す終助詞です。「この矢を外させないでください」と、神に的中を強く願う言葉になっています。

問11 (あ)扇も射やすそうな状態になったのだった。(い)与一の祈りが通じたかのように風が弱まり、揺れていた扇が静まって、ねらいやすい絶好の状態になったということ。

＜解説＞「射よげに」は「射やすそうに・射るのによい具合に」の意。「こそ～けれ」は係り結びで、強調を表します。神に祈った直後に風がやんで扇が射やすくなる、という劇的な場面で、与一の的中への期待が高まる箇所です。

問12 (あ)係りの助詞…こそ (い)結びの語…けれ (活用形＝已然形)

＜解説＞「扇も射よげにこそなつたりけれ」は、係りの助詞「こそ」を受けて、文末が已然形「けれ」で結ばれています。「こそ～已然形」の係り結びで、扇が射やすくなったことを強調しています。

問13 現代仮名遣い…よっぴいて。意味…弓を十分に引きしぼって。

＜解説＞「よっぴいて」は「よく引きて」が変化した形で、弓をいっぱい引き絞る様子を表します。「つぴ」は促音・拗音化しているので、現代仮名遣いでは「よっぴいて」と書きます。

問14 (あ)海へ落ちて入っていった。(い)空へと舞い上がった（そののち、しばらく空中でひらめいてから海へ散り落ちた）。

＜解説＞「簞は海へ入りければ、扇は空へぞ上がりける」とあるとおり、矢は海へ落ち、射切られた扇は空高く舞い上がりました。扇はそのあと「しばしは虚空にひらめきける」（しばらく空中でひらひらしていた）あと、海へ散っていきます。

問15 擬音語（擬声語）

＜解説＞「ひやうど」「ひいふつと」は、矢が放たれる音や、扇を射切る音をまねて表した言葉で、これを「擬音語（擬声語）」といいます。耳に残る音を写すことで、合戦の緊張感や与一の弓の見事さが生き生きと伝わってきます。

問16 ア

＜解説＞「小兵といふぢやう（＝体は小柄だというものの）」「十二束三伏（＝矢の長さ。長く力強い矢）」「弓は強し（＝弓は強い）」とあり、体は小柄ながら強い弓を引く、力のある若武者として描かれています。よってアが正解。イ・ウ・エは本文の内容と合いません。

問17 ねらいを外さず・的を外さず (少しもあやまることなく)。

＜解説＞「あやまたず」は「あやまた (=間違える・外す)」+打消「ず」で、「外すことなく・的中して」の意。一寸ほどの所をねらって、ねらい違わず扇の要のきわを射切った、という見事な命中ぶりを表します。

問18 無常観 (無常)

＜解説＞美しく揺れていた扇がひともみされて散っていく描写には、栄えるものもいつかは滅びるという「無常」の感覚がにじみます。『平家物語』冒頭の「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり」に示される無常観が、作品全体を貫いています。

問19 (扇は) 春風にひともみふたもみ揉まれて、海へさつと散り落ちたのだった。

＜解説＞「一もみ二もみもまれて」は「ひともみふたもみ揉まれて」、「さつとぞ散つたりける」は「さつと散ったのだった」の意。空に舞い上がった扇が、春風に弄ばれるように揺れて海へ散る、はかなくも美しい名場面です。「ぞ〜ける」は係り結びで強調を表します。

問20 (あ)軍記物語 (い)琵琶法師

＜解説＞合戦や武士の興亡を描いた物語を「軍記物語」といい、『平家物語』はその代表作です。『平家物語』は、琵琶を弾きながら語る「琵琶法師」によって各地に語り広められました (語り伝えられた形を「語り本」といいます)。

問21 イ (鎌倉時代)

＜解説＞『平家物語』は鎌倉時代に成立したと考えられている軍記物語です。平安時代末期に起こった源平の争乱を描き、滅びゆく平家のあわれを無常観とともに語っています。

問22 (あ)屋島の戦い (い)源氏

＜解説＞扇の的の場面は、讃岐国 (今の香川県) の屋島で行われた「屋島の戦い」での出来事です。那須与一は源氏方の若武者で、平家方が掲げた扇の的を射るよう命じられ、見事に射落としました。
